

武蔵野日曜聖書講筵

聖霊の幕屋

—— 詩篇第23篇 ——

1980年1月6日

小池辰雄

牧人と羊の群 実存主 神の羊 コペルニクスの転回 平安 天国的な現実 十字架則聖霊
地獄的な現実 「中に」 煉獄的な現実 私はエホバの家 聖霊の宮 信行一如 召団讃歌A7
「わが主キリストは」

【詩篇23】（私訳）

ダビデの絃歌

1 エホバこそはわが牧人、私は何も困らない。

2 若草の野に彼は私を臥させ、

憩いの水汀に伴れゆき給う。

3 わが魂を彼は甦らせ、

義しき道に導き給う、聖名のゆえにこそ。

4 また縦い死の陰の谷を渉るとも

私は禍害を恐れない。

あなたが共に在ますから。

あなたの笞、あなたの杖、それが私を慰める。

5 あなたはわが眼のあたりに筵を備え給う、

わが諸々の敵前で。

あなたはわが首を油漬けにし給う、

ああわが酒杯は溢れた。

6 誠に善福と恩恵とが私を追跡する、

わが生命の日の限り。

かくて私はエホバの家に住む、

日に日が続き果てるまで。

●牧人と羊の群

イスラエルの宗教は、何と言っても、遊牧の民において与えられた宗教ですから、牧者と羊の群の姿として、神とイスラエルの民の深い関係を、牧人と羊の群との関係において、



自然に歌われた詩篇です。「ダビデの歌」とありますが、果たしてダビデが作ったかは別問題です。しかし、ダビデ自身が少年時代に牧童でありましたから、彼が作ったとして一向差し支えない内容のものです。非常に大事なものは――私はこれはほとんどもちろん暗記して知ってますけれども――聖書というものは非常に大部なものですから、その中でも特に大事なところは繰り返し読んで、そして身に付けていただきたいわけです。

たとえば、日本の歌では、「荒城の月」というのは素晴らしい、誰でもが――この歌は切手にもなりましたが――時々、くちずさみたくなる。ドイツでは「ローレライ」というようなことで、詩篇でいうと、詩篇23篇というようなことです。

先程、司会者が読んだイザヤ書43章は、これからのキリスト者また日本人が、ただならぬ現実に入っていきますが、それにおいて本当に力強く勇ましくまた忍耐深く生活し戦っていく上に、イザヤ書43章1〜13節までは、この中に福音が全部もられているようなところです。イザヤ書は旧約の中でも一番大事なところですが、その中でもまた特に第二イザヤ――40章から55章まで――そのうちの第43章は非常に力強いところです。またよく味わってください。むしろ、年頭に私はここをやってもいいと思っただくらいですけれども。不思議にそう思っていたんです、正直。『詩篇』（小池辰雄著作集第四巻『詩篇珠玉集』1980年刊）が今度出るので、詩篇の方にしたわけです。イザヤ書43章にも時々触れます。

●実存主

「エホバこそはわが牧人、私は何も困らない。」

「エホバ」というのは本来、神の名前は、

「ヤーヴェー」（有りて在るもの）

という。「実存者」「有りて在るもの」です。

「我は有りて在るものなり」

という。太陽は在りて、地球を在らしめている。有ることが他をして在らしめている在り方が、本当の恵みある在り方なんです。神・仏は正に、有ることが人をして在らしめている。それが「実存」という本当の意味です。自らをそこに有に投げ出すような、働きかけていくような存在です。それから、

「アドナイ」（わが主）

ということ。ユダヤ人は経典を読むとき、その神の名を呼ぶときに、

「ヤーヴェー」

と読まないで、「アドナイ」と読んでいた。「我が主」という意味です。即ち、「ヤーヴェー」という子音と「アドナイ」という母音とを混ぜ合わせて読んでしまったのが、

「エホバ」

という言い方になってしまったわけです。歴史的にそういうように間違えた。本来は「ヤ



「ヴェー」である。それを「アドナイ」と読んだ。だから、「エホバ」というのは、「実存者にしてわが主」という両方の意味を持つている。「エホバ」は「実存主」という意味になる。今はもちろん、学問的には「ヤーヴェー」と言うけれども、今までの歴史的な読み間違えが却って面白いから、私は「エホバ」という言葉をなお続けて使いたいと思っているわけです。「エホバ」というのは、

「実存のわが主」

という意味です。

●神の羊

「エホバこそはわが牧人」

であると。これは「人生の歌」(サム・オブ・ライフ)と言ってもいいわけです。神さまは、自分を牧している者。即ち、自分は神さまの羊です。自分を本当に神の羊として生きた人はキリストなんです。だから、キリストのことを、

「羔」

という。この字は普通、みんな読めない。羔(小羊)という字がイザヤ書にも出てくる。イザヤ書40章11節に、

「主は牧者のごとくその群をやしない、その臂かひなにて小羊をいだき之をその懷中ふところにいれてたずさえ、乳をふくまする者をやわからかに導きたまわん。」(イザヤ

40・11)

と、実に懇ろな言い方をしている。即ち、「羊」は従順なるもの、従うものです。

「人の最初の不従順が罪である」

ということをミルトンが『パラダイス・ロスト』の一番先に書いてある。神さまの言いつけに背いたことが罪である。アダム、イブがそのような間違いをした。もちろんあれは一つの神話ですけども、その神話が実に我々の現実をはつきりと言いつつ切っているわけです。

キリストは神の羊として従っていた。だから、キリストは

「汝の御意を成させ給え。あなたの御意に私は従います。自分の意ではありません。」

と、自分の意志を投げ出しているわけです。

自分の意志を投げ出すということは、普通の青年にはできない。

「よし、俺がやってやる」

と、みんな勢がいい。だから、

「キリスト教はどうも神頼みで意気地がない」

と、ニーチェなんていうのは、そういう意味で反抗したわけです。もちろん、当時のキリスト教の在り方に対する批判でもあった。「山上の垂訓」なんかは、ニーチェに言わせれば、



「そんな意気地のないキリスト教道徳なんてものは……」

と、散々やつつけるわけです。ニーチェの言葉は、ひっくり返すと非常に真理を持っている。自分を本当に投げ出すということ。ところが、自分を投げだすということは何かということ。人間はみんなエゴイズムです。今朝もテレビの「宗教の時間」でやってましたよ。仏教の坊さんが、

「人間はみんなエゴイストだ」

と。それから、道元を引用してね、悟りにくるいろいろなことを言ってましたが。しかし、聞いていて、大いにそこに真理性はあるけれども、もう一つ足りないですね、仏教には。私はどうしても、今度の『無の神学』（小池辰雄著作集第三巻 1982年刊）では、仏教も全部ひつくるめたものを書きたいと思っています。

●コペルニクスの転回

「エゴイズム」「エゴ」

という「我」というやつ。また、このエゴがなければ正直、文明文化は展開していかない。エゴイズムの展開、自己拡充的なものがなければ。それをただ殺してしまうのではない。殺してしまったら、どうにもならない。その

「エゴツェントリッシュ」（自己中心的）

なものを今度は、

「テオツェントリッシュ」（神中心的）

に変えるわけなんです。自己中心の衝動を神中心に切り替えるわけです。これは自分ではできないですよ。そこにこの福音の世界がある。キリストはそれをやったわけなんです。キリストだって、自分の思いははつきりある人なんだ。けれども、

「これはみんな神さまに預けてしまおう、投げかけてしまおう」

と。そして、神中心になって、この「エゴイズム」は

「テオイズム」「神中心」

になった。

「地球の回りを太陽が回る」

と思っていたところが、

「地球は逆に太陽の回りを回っていた」

ということに気がつくわけだ。太陽中心です。初めは天動説だった。今度は地動説になった。これを「コペルニクスの転回」というんですよ。コペルニクスが天動説を地動説に変えてしまった。これは物理の世界の常識的な真理ですね。

ところが、宗教の、人間の心の世界で、なかなかこの常識が常識にならない。相変わらず、地球中心に、自己中心で動いている。これを神中心に動いたのは、これを徹底的に100%に



したのが、キリストやお釈迦さんです。

だから、「神さまー」と言つて、自分を神中心にするために、キリストは自分を完全に神の懷の中に投げ入れてしまったんです。神と一つになつてしまったから、動いているのは今度は、

「神的な自分」

なんです。もう「自分」とは言わない自分です。

「我ならざる我」

というもの。だから、今度はキリストは、

「我を見し者は父を見しなり」

と言えたんでしょ。

「私を見た者は神さまを見たのだ」

と。だから、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書を読んで、

「このキリストの言葉や行為、その存在そのものにおいて神が現象している」

ことを見る人は、本当にこの福音書を掴^{つか}む人になる。それをいつまでたっても、

「こんなことがあるか、これは何か？」

なんてやっているうちは、いつまでたつても始まらない。

たとえば、普通の人とはみんな知・情・意がある。今は非常に知的な世界だ。知が中心になつている。ものを判断するのに、一生懸命で知能でもつてする。もちろん、知の働きは結構です。情の働きも、意志の働きもみんな結構です。けれども、これがみんな、相対的なそういういたものを絶対化して、これを中心にしてやっているから、いつまでたつても始まらない。

世界の動きを見ていても、国家という自己中心になっている。もう危ないですね、正直。アメリカとソ連の間がおかしくなってきた。それが今度はどういうように波及していくか分からない。国家といえども、個人といえども、もう一つ絶するものがある。神でも仏でもいいですよ。とにかく、そういうような絶対的な世界を持たないで、相対界において自分を絶対化していくから、とんでもないことになつていく。もうこんなはつきりしたことはない。太陽を見てくれと、正直言いたくなるよ。少しお天道さんを拝んだらいいだろう、本当に。お天道さんがどこかへ行つてしまったら、地球はもうお終いでしょ。今から何億年か後にはそうなるそうだ。

そういうことに早く気がついて、

「こんな自分なんていうものをいつまでも問題にして何になるか」

と。相対的なものを問題にして、何になるんですか。絶対的なものを問題にして、そこに自分を飛び込ませたらいいではないですか。そうしたら、相対的なものの中に絶対的なものが入ってくるんです。この部屋の空間は相対的な空間です。けれども、地球上の空気と繋が^{つな}っているから、我々は窒息しないんだ。無限無量なものと繋がっているから。有限



でありながら、無限の質を持っている。だから、無限の質をその中に戴かなくては。いわゆる文明文化ではダメなんだ。もう一つ奥に宗教の世界がある。本当の根つこの世界がある。このことに、日本の教育が、小学校から大学に至るまで、先生方がその本当の角度を持っていないから。いつまでたつても、この教育がダメです。

●平安

羊は牧者の言いなりに動いている。そうでしょ。羊は

「私はこつちへ行こう」

なんてやらない。牧者に導かれて動いている。緑の牧場、憩いの水汀に。

若草の野に彼は私を臥させ、

憩いの水汀に伴れゆき給う。

群だけでも、ここに「我」という単数で書いてる。群をただ頼んでいるような我ではダメなんです。「我」という個において、この「群」という全が――「一即全」という。「全即一」と言ってもいい――全ての人たち、群の一人というものにおいて、群が反映しているような自己。あるいは、群を背負っているような自己。そういった我というものの自覚。この自覚が本当の自覚になるためには、絶対的なものに依存しなければ、本当の自覚は出てこない。相対的な我に過ぎない。この我が絶対的な質を持つてくるのは、これに於いてです。手放して絶対化したら、とんでもない。それはエゴイズムになってしまう。絶対者との相対において、初めてこの我は本当の人格になる。一人びとりの顔がみんな違うように、一人びとりの人格は唯一絶対のものを持つている。それぞれ、他と比較する必要はないんです。そういう個というもの。そして、この関係において初めて、これが全となる。一人びとりの個が絶対者との関係を持つて初めて、これが本当の全となる。

申し上げているとおり、これが

「平安」

ということ。本当の平安は、神・仏の中に自分があるときに、本当の平安です。運命・環境がどうあろうと、そんなことは問題でない。人間の相対的現実、運命・環境、悲しいことやいろいろなことがあるよ、病気になるったり、人が死んだり、いろいろなことがある。そういうようなことが起きてくる。けれども、そういったいろいろな相対的な波風をもうひとつ超えたところの、神との本当の平安がある。だから、私は必ず手紙には、手紙の表に「平安」と書きます。

「平安があなたに在るように」

という祈りの意味で書くんです。

神との関係が「平安」である。そうすると、人間の関係に「平和」が来る。平安ぬきの平和なんていうのは偽りの平和だ。相対的な平和は、いくら平和運動なんかやってもダメ



です。まず、

「平安運動」

をやってくれなければ。我々は平安運動をやっているんだ、このキリスト教の集会というのは。1980年代はただでは済まないですよ。ですから、もう本当にもの凄い世界に入っていないとね。いいですか。

羊は牧者に対して完全に依存している。羊は弱いんです。狼が来れば、食われてしまう。獅子が来れば、食われてしまう。けれども、牧者はそれを守ってくれている。完全にこれに依存している。

「我弱きときに強し」

とパウロが言ったが、そういうわけです。キリストは、「^{こひつじ}羔」と言われるように、完全に神さまに自己を依存して、もう

「在れども無きが如く、無けれども在るが如し」

という自在な世界に入ってしまったている。

●天国的な現実

1 エホバこそはわが牧人、私は何も困らない。

我々は「エホバ」の代わりに、キリストでいい。

「キリストこそはわが牧人なり」

と。キリストは私たちを救ってくれたんだから。だから、

「私は何も困らない」

という。私は何も困らない。相対的には困ることもあるよ。けれども、本当の意味では困らない。

2 若草の野に彼（あなた）は私を臥させ、

「彼は」というけれども、本当は「汝は」がいいんだ。聖書は、三人称で書いてあっても、内容的にはそれを二人称に直して読んでなければダメですよ。いつも、

「あなたは」

と。神さまは、いつも「あなた」なんです、「彼」ではない。

2 若草の野に彼（あなた）は私を臥させ、

憩いの水汀に伴れゆき給う。

と。天国的な楽しい現実だよ。

3 わが魂を彼（あなた）は甦らせ、

義しき道に導き給う、聖名のゆえにこそ。

「私のために」ではない。

「聖名のゆえ」



なんです。聖名が本当に現実となるためには、聖霊が来なければダメです。これは使徒たちが、キリストの直弟子たちがキリストと地上で一緒に居たときは、非常に良さそうなんだけれども、ダメなんです。ペテロなんていうのはその一番のチャンピオンだったけれども、躓いたり転んだりしている。それは聖霊が来てないから。

●十字架則聖霊

キリストがまず、十字架に架かって、全部贖罪して、罪を贖って、我々の現在・過去・未来の罪を——「罪」というのは結局、要するに「エゴ」のいろんな現れ方が罪なんです。

「どの罪ですか？」

ではない。「自己中心である」ことが罪の根源なんだから——

「そいつは全部、取ってしまったよ」

という。それが十字架なんだ。

「それからお前をはずしてしまったよ」

と。だけど、まだはずれてませんよ。いいよ、それは。相対的な我々は死に至るまでダメなんだ。ダメな面が必ずあるんだよ、人間というやつは。けれども、そんなダメなものを問題にしているうちは、それこそダメだ。そんなダメなものの奥に、ダメでない現実を賜っているのが、この贖罪という驚くべき

「キリストの十字架の贖いの事実」

なんです。

「ああ、もう全部、私は贖いとられた」

と。だから、私は無罪者なんだ。罪からはずれている。私が言うところの

「無」

という言葉の意味はいろんな意味があります。罪無き者にされている。そこに今度は、キリストは十字架に架かったあとで天界から聖霊をくだした。だから、

「無即無限無量」

となる。「無限無量」なるものがこの

「聖霊」

です。無限無量の生命、それは真理でもあり、恵みそのものでもあり、要するに霊のキリストが御霊として入って来るわけです。これが、

「永遠の生命」

です。それを受けとらなかつたら、どうにもならん。

普通のキリスト教は、「十字架の贖罪」ばかり言って、その命題だけは信じている。今までの無教会は大方そうだ。もちろん、「永遠の生命」ということは言いますよ。けれども、それはただ観念されているので、本当にそこが事実であるなら、なぜ、「聖霊」のことをもつ



とはつきりと言わないか。私が

「無即無限無量」

と言うのは、

「十字架則聖霊」

と言うことと同じことなんです。十字架を本当に受けとれば、聖霊は来ざるを得ない。聖霊の現実が、今読んだ1節から3節です。これが即ち天国的な現実です。もう完全にあなた任せで、緑の牧場、憩いの水汀に伴^つれて行^つていただく。そして、本当に神を讃美する楽しい現実です。これが天国的現実です。

神・キリストを本当に自分が受けとって、そして生きていけば——我々の相対的現実には、ちようど雨が降ったり、風が吹いたり、雲がかかったり、雪が降ったり、いろいろするよ。けれども、それにも拘らず——何だかしらんけれども、本当に楽しくてしょうがない。楽しみを求めるのではない。楽しみがこぼれてくるんです。それを目的とすることは御利益宗教になる。けれども、一つであるところには必ずそういう現実がこぼれてくる。そういう人がいますよ。

「あんなにいろんな患難にあつていながら、あの人はいつも微笑んでいるな。愚痴を言わないな」

と。それは本当にその世界にその魂が入っているからです。女の人の中に時々そういう人がいます。素晴らしいです。そういう中に自分が入ってしまった。それが即ち、天国的な現実です。

●地獄的な現実

4 また縦^{たと}い死の陰の谷^{わた}を渉^{わた}るとも

私は禍害^{わざわい}を恐れない。

あなたが共に在^いますから。

あなたの笞^{しもと}、あなたの杖、それが私を慰める。

今度のはつきりと、「あなた」になってしまった。これが地獄的な現実です。地獄的な現実にも、ただ地獄が地獄でないわけです。誰でもが必ずこの「死の陰の谷」を渉^{わた}らなければならぬ。

「死の陰の谷」

というのは、ここで言われているのはもちろん、「ワーディ」という非常に深い谷間、そこには水がない。岩陰から猛獣が現れたり、盗賊が現れたりする。そういう所でもなお牧者は守ってくれる。「笞^{しもと}と杖」というのは、「杖」は羊を導く杖です。「笞^{しもと}」というのは、先に鉄が付いていて、槍みたいになっている。牧者が悪い奴をやっつける。その武器をちゃんと持っている。



「牧者が守ってくれるから、死を脅かされるような谷間を歩いて、ちつとも恐くない。あなたが一緒にいらつしやるから」

というわけです。モーセが出エジプトする時に、

「私はとてもそんなことはできません。エジプトの軍勢が来たら、どうにもならんから」

と言ったら、神さまは、

「お前はイスラエルの民をエジプトから逃してやって、カナンの地（今のパレスチナ）に伴れて行け。私がお前と一緒にいるから」

と言った。

「そうですか、それでは行きます」

と。それで、モーセは本当に羊となって神さまの力に全托して、そして、あの紅海を渡った。「十誡」という有名な映画に出てくるように、モーセが手を挙げれば、風が吹いてきて、海が二つに割れる。手を下げれば、エジプトの軍勢が吞まれてしまった。

そういう地的な危機は、私たちの現実を脅かしている。まあ、いきなり第三次戦争はすぐ来るとは思いませんけれども、その前哨戦的なものは恐らくやって来るでしょうね。日本は非常に危ない所の一つです。

昨日からテレビでいろいろな生活問題のこの座談をやってましたね。これからはいい加減なことでは、現実は乗り切れない。昔のように、むしろ本当に自分で工夫して行かなくてはいかんと。坊さんのような――坊さんとまで言わなくとも――いわゆるカロリーなんて考えなくたって、人間の身体は大丈夫なんです。ただ、今は食べるものが非常に害されているから、なるだけ害を受けてない、天然のものを食べるようにしなくては。また、自分でそういうものを作るようにやっていかなければね。そういう、すべての意味で本当に、「元始に帰れ」ということです。

「魂の世界でも元始の福音の世界に帰れ。自然の生活でもっと元始的になって行け」

と。文明文化が行き過ぎてしまったということです。

●「中」

私は禍害を恐れぬ。

あなたが共に在りますから。

禍害は来たりしますよ。

「禍害は神さまからも来る」

なんて、ヨブ記にも書いてある。とにかく、現実には劇的です。けれども、大事なものは、相



対的な運命環境を変えるのではなくして、その中を潜りぬけていく。潜りぬけていくには、「なんじ我と共に」という、

「あなたが私と一緒にいらつしやるから」

ということ。旧約の世界ではこの

「共に」

ということをよく言う。イザヤ書43章にも、

「なんじ水の中をすぐるときは我ともにあらん。」

私も一緒にいるぞと。

河のなかを過ぐるときは水なんじの上にあふれじ。なんじ火の中をゆくとき
焚^{やか}るることなく火^ほ焰^おもまた燃えつかじ。」(イザヤ43・2)

私が一緒にいるから、水は溢れないぞ、火が燃えつかないぞと。これも「共に」です。ダニエル記にも、

「火の中に投げ入れられてもなお焼けなかった」

と、もの凄いことが書いてある。

今度は新約に來ると、「共に」もちろんあるけれども、「中に」です。

「私はキリストの中にいます。キリストは私の中にいます」

と。ということは、キリストの御霊のことです。聖霊のことです。神霊のことです。これはパウロがしょっちゅう言っている。預言者は「共に」と言いながら、もちろん預言者の中には神の霊が來てますよ。來てなければ、あれだけの預言や実存は出來ません。けれども、「中に」という言葉が旧約ではやっぱり非常に少ない。これが新約になると、もう十字架を通っていますから、聖霊が來ると、この「中」の世界です。

ところが、私は無教会時代にはこの

「中」

ということとは正直、あまり聞かなかった。一種の形容詞くらいになっちゃってしまっていて。いつも何か、対^{たい}している。ただ

「信仰、信仰」

と言っている。信じ仰いでばかりいる。むしろ信じ交わらなければいかん。「中」の世界です。私たちは空気を見て生きていますか。空気を思っ^{おも}て生きていますか。空気の中にいるでしょ。また、空気は私たちの中に入^{はい}ってしまっているではないですか。それで、血はしょっちゅう清まっている。30秒くらいで身体の中をグルグル回っている。私たちは空気の気の中に、大気の中にいる。

今度は、神さまの靈氣なんです。靈氣、大気、天氣という。

「氣」

という字は非常に大事な字です。風でもあり、靈でもあり、氣でもあり、息でもある。「氣」



という字は、ヘブライ語でも、ギリシャ語でも、それらはみんな同じ字です。我々はキリストの霊気、即ち聖霊の中いなくてはいけない。肉体は空気の中にある。肉体ばかりが空気の中にあつて、魂がお留守になつていゝんだ、普通の人間は。魂がなぜ、神の霊気、仏の霊気の中にいないんですか。

今朝の坊さんの話を聞いていても、もう一歩足りないんです、その「中」の世界が。いいことは言っているんだけど、まだ努力の世界が大いに来ている。妙好人のことも例えて言っていたけれども。妙好人が

「ただ、ただ」

と言っている。あれはいい、「ただ」というのは。「ただ」ということは、私に言わせれば、

「無」

の世界なんです。何も工作しない世界。何も工作しないで、ただありのまま、ただ賜っている。もう一つ別な言葉で言う、無条件の世界なんです。条件が要らない。こつち側に何の条件も要らない。

空気、霊気。肉体は空気の中にいる。我々の魂は霊気の中にいる。いいですか。そうしたら自然に、何か今まで身体がちよつとおかしかったが、知らない間にうまくなつてしまつたなんていうことになる。ちよつと私が手を当てれば、グーッとそれが働くから。私から流れていく。私は聖霊を受けるまでは、いわゆる無教会時代はこれが無かつたものだから、観念信仰だから、どうにもならん。「信仰、信仰」なんて言つてね、ダメだよ、そんなものは。

「自分の信仰」

なんてものは、問題にするからいかん。

「私は何もない」

と言っている。そういう霊気の中に入つてしまつてゐるから。私は、お客さんが来てお話をしているうちに——お説教ではないよ——自然にそういう話になつてしまつと、そうするともう異言が出そうになつて困る。

霊気。その中に入つてしまつたら、もう「共に」ではなくて、

「あなたが中にいらつしやるから、私は本当の慰めを受ける」

と。「慰め」と言つたつて、普通の意味の慰めではない。その「中」の世界に入ると、これが地獄的現実をも突破できるんです。

●煉獄的な現実

今度は、煉獄です。「天国・地獄・煉獄」という、この三相がこの短い詩篇の中に表れているわけです。この最後の煉獄のところに行つて、今言つた聖霊のことがもつとはつきり出てくる。

5 あなたはわが眼のあたりに筵を備え給う、



わが諸々の敵前で。

普通は、敵前で宴会なんかやっている、これはやつつけられるよ。いい気になっていると、信長が奇襲したでしょ、桶狭間で。ああいうようなわけで。ところが、この宴は、そんな呑気な宴ではない。

あなたはわが首を油漬けにし給う、

ああわが酒杯は溢れた。

「首に油を注ぐ」というのは即ち、聖霊を注ぐことです。「キリスト」というのは

「油注がれたる者」「メシヤ」

という意味ですから。旧約のヘブライ語では「メシヤ」「神の霊を注がれたる者」のことを「油注がれたる者」という。これはオリーブの油を注いで、そういった——儀式ではない、形式ではない——一つの徴として、そういうことをしながら、神霊を注ぐ、伝えるわけです。預言者が、神の霊の人がそういうことをする。ダビデでもそうです、「油注がれたる者」です。

「ああわが酒杯は溢れた」

葡萄酒の酒杯をよく飲む。けれども、これは「我という酒杯」です。

「我という、このあなたの酒杯は、あなたの生命、あなたの永遠の生命、あなたの聖霊でもって満ち溢れています」

と。新約の角度から読めば、そういうことになります。

●私はエホバの家

6 誠に善福と恩恵とが私を追跡する、

わが生命の日の限り。

「わが生命の日の限り」どころでない。「永遠に」です、新約では。地上にありながら、もう死の世界を突破していますから。相対的な死はもはや問題でない。死を突破する。そんなものは突破してしまう、永遠に。

十字架上の片一方の盗賊が心碎けて、

「私は悪いことをしましたが、せめても、私を覚えてください」

と言ったら、

「お前は、今日、私と一緒にパラダイスだ」

とキリストは言われたでしょ。十字架の片一方の盗賊がキリストと一緒に天界に入ってしまった。

「汝、今日、我と共にパラダイスだ」

と。これが即ち、聖霊の中に入っていると、いつも恵みとまことが——新約で言う「恩恵と真理」です——永遠に。この地上の「日が尽きるまで」ではない。

「地上の日はなお突破して永遠に」



ということ。

かくて私はエホバの家に住む、

日に日が続き果てるまで。

「エホバの家に住む」ではない。今度は、

「私はエホバの家となる」

ということ。そう訳したいけれども、そこまで訳してしまうと困るから、「住む」と原文通りに訳してありますけれども、新約の角度で言えば、

「かくて、私はエホバの神さまの家となります」

ということ。自分自身が家となるわけです。

●聖霊の宮

コリント前書を見てください。2章1節、

「兄弟よ、われ先に汝らに到りしとき、神の証を伝うるに言と智慧との優れたるを用いざりき。² イエス・キリスト及びその十字架に釘付けられ給いし事のほかは、汝らの中にありて何をも知るまじと心を定めたればなり。

と、非常に十字架のキリストをはつきり言つて、

³ 我なんじらと偕に居りし時に弱く、かつ懼れ、甚く戦けり。⁴ わが談話も、宣教も、智慧の美しき言によらずして、御霊と能力との証明によりたり。

聖霊と能力との証明によつたという。キリストの力です。

⁵ これ汝らの信仰の、人の智慧によらず、神の能力に頼らん為なり。」（コリント前2:1-5）

神の力に頼る。ここところは非常に聖霊のことが書いてある。それから、3章に行きまして、3章9節、

「我らは神と共に働く者なり。汝らは神の畠なり、また神の建築物なり。」（コリント前3:9）

お前さんたちは神の畠で、建築物であると。まだ、更に行きまして、16節、

「汝ら知らずや、汝らは神の宮にして神の御霊なんじらの中に住み給うを。

お前たちが活ける神殿だ。神の霊が、キリストの霊がお前たちの中に住んでいるから、神さまの宮なんだと。

¹⁷ 人もし神の宮を毀たば神かれを毀ち給わん。それ神の宮は聖なり、汝らも亦かくの如し。」（コリント前3:16-17）

「聖者」と言われるところのものと。手放して聖者ではないですよ、我々は。神の聖が入っている、そういう意味の聖者であり、そういう意味の義人であるわけです。これはみんな神のものです。自分のものではない。



そういう「神の宮」「聖霊の宮」というようなことがここに出ている。6章にもはっきり出ている。6章17節、

「¹⁷主につく者は之と一つ霊となるなり。」

神さまと、キリストと一つになって、19節、

¹⁹ 汝らの身はその内にある、神より受けたる聖霊の宮にして汝らは己の者にあらざるを知らぬか。」（コリント前6・17、19）

と。そこにはつきり、「聖霊の宮」と書いてある。神の宮、聖霊の宮、キリストの宮——何と言つてもいい——要するに、我々のこの活ける身体が神の神殿であるということなのです。

「私は三日目に建てるぞ」

とキリストが言われたのは、

「三日目に自分は甦つてくるぞ。自分が活ける神殿だ」

ということ。だから、「宮に住まん」ではなくて、「宮とならん」なんです、本当は。

「かくて私はエホバの家に住む、日に日が続き果てるまで。」

は、

「かくて私はエホバの家となる、永遠に。」

ということなのです。詩篇23篇も、新約の光で読めば、グーツとその内容が凄いことになる。

● 信行一如

私はその角度から讃美歌を作りましたから。後でそれを歌います。この12月には讃美歌を11歌作ってしまった。知らない間にできてしまった。まだこれからも、今年はまた多分出てくる。そのうちに讃美歌集を作ろうかと思つていくくらいです。

だから、詩篇23篇は、天国・地獄・煉獄、どの現実であろうとも、キリストに在つては、それに対処することができ、本当にまた、人をその中に入れる。どうぞ皆さんは、この一年間にぜひとも一人は救いに導く、それだけの気魄でやってください。救われて満足してはダメなんです。一人が一人を導く。今度のクリスマスには、みんなが一人ずつ伴れて来るだけの覚悟で、生活をもつて伝道してください。私はこの前、京都でもそのことを言つて来ました。クリスチャンが「救われた」なんて言つて満足していることではダメなんです。

「私は語らざるを得ない」

と言つて、告白していく。いわゆる折伏式しやくふくな、押しつけるような、そんな伝道はもちろんしない方がいい。そんなことはごめんだ、いわゆる宗教臭いのは。けれども自然に、

「そうか、それではひとつ、集会に行つてみよう」

というわけだね。私は何も宗派的な根性は持つていませんから。皆さんも、そういった突き抜けた気持でもつて、ぜひやってください。何かしらんが、一人は伴れてくるぞと。本当にその気で行かなければダメです。もうこれからは、「しんこう」は



「信行」

です。信じ行ずる。信行一如の在り方を、もうこの80年代は必要としますから。「信仰と行為」なんていう、そんな二段構えではない。

「信行一如」

です。信行一如で行きましょう。私もこれから頑張りますから、そういう意味で。そういうわけで、大いにひとつ行きましょう。だから、詩篇23篇は、我々は本当にキリストと共に、キリストの中に在って、羊となつて行く。獅子よりもこの羊の方が強いんだ。最も弱き者が最も強い。これはキリストが一緒だから。キリストが一緒に中にいらつしゃるから。そういうことで、この23篇を行じていきたい。宮となつていく。いいですね。

●召団讃歌A7「わが主キリストは」

旧約の詩篇23篇をもう乗り越えなくてはいけないから、私は詩篇23篇の讃美歌を作った。これは12月27日に作ったものです。これは「さまよえる人々」の歌調で歌う。

召団讃歌A7「わが主キリストは」

(1979年12月27日作、讃美歌239「さまよう人々」の歌調で)

1 わが主キリストは わが牧人

若草の野辺に われを臥させ
憩いの水汀に 伴れゆき給う
これこそ聖国の すがたなれや

2 たとい死の陰の 谷を住くも

われにおそれなし 汝れは我れと
共に在し給う 汝れの情け
汝がみ霊こそは わが生命ぞ

3 わが主はわがため 仇敵の前に

み霊の油を そそぎ給う
敵をも愛する 心こそは
聖霊より出づる 力なれや

4 恩恵と真理は 聖霊なれば

われらの中にぞ 入り来れる
これぞ永遠の いのちなれば
われらは聖霊の 幕屋たれや

